

# 18 世紀英国演劇におけるスパウティング・クラブの流行と消滅：

‘スパウター’とは何であったのか？

南 隆 太<sup>1)</sup>

## 1. 捕縛されるスパウターとは？<sup>2)</sup>

1761 年 12 月 14 日、ロンドンのストランドにあるパブで『オセロ』を演じていた若者たちが逮捕され、取り調べの後、そのうち主な役を演じていた三人がブライドウェル矯正院に送られた<sup>3)</sup>。もともとは反政府的な演劇作品を取り締まるために初代首相ロバート・ウォルポールが 1737 年に成立させた演劇検閲法 (Licensing Act) によれば、勅許劇場以外でシェイクスピアなどの 5 幕のセリフ劇の上演が禁止されていたため、パブで『オセロ』を演じた集団が逮捕されたのは当然のように思える。しかしながら 18 世紀の中頃には歌やダンスを取り入れた舞台作品を上演する勅許を持たない非正規劇場 (illegitimate theatres) が少なからず存在したこと、10 年前の 1751 年 3 月に国会議員のフランシス・デラヴァル (Sir Francis Blake Delaval) が、ロンドンのドゥルリー・レイン劇場を貸し切って家族や友人と『オセロ』を上演し、皇太子をはじめ多くの貴族や国会議員が劇場に詰め掛けたこと、さらに郷土や貴族などが私邸で友人を招いて行う私的な演劇上演 (private theatricals) が珍しくなかったことを考えると、ストランドのパブでの逮捕劇には些か違和感があるのではないだろうか<sup>4)</sup>。

この逮捕劇の背景には、1750 年前後から伝染病のように流行し (epidemic Rage)<sup>5)</sup>、次第にその存在が社会的に認知されるようになったスパウター (spouter) と呼ばれる徒弟や若い職人たちと、スパウターがパブなどに集り演技を披露するスパウティング・クラブ (spouting clubs) を取り締ろうとする動きがあった。実際にロンドンのみならずブリistol やバースなど地方の主要都市にもスパウティング・クラブは存在し、1760 年代から 80 年代にかけて新聞を含め、さまざまな印刷メディアでスパウターとスパウティング・クラブという言葉を見かけるようになる。18 世紀後半に舞台や印刷メディアに突然現れたスパウターとは何者で、なぜこの時代に流行し、新聞や雑誌でどのように取り上げられていたのか。本論は、18 世紀後半に見られた「スパウター／スパウティング・クラブ」の流行について、主に印刷メディアに見られる種々の言説を渉猟し、当時のイギリス社会において変容するスパウターとスパウティング・クラブの位置づけを明らかにしようとするものである。

## 2. スパウター、舞台に登場する

徒弟を中心とする若者が芝居に夢中になるというのは、何も18世紀後半に始まったことではなく、17世紀にも芝居好きの徒弟が舞台に登場する例がある。『輝けるすりこぎの騎士』(*The Knight of the Pestle*, 1613年)に出てくるレイフ(Rafe)は、イギリス演劇史上で最も有名な最初の「演じる徒弟」の例だろう。劇の導入部(induction)において、観客席で主人の妻から、芝居がうまいから舞台に上がって演じるように言われた徒弟のレイフは、役者としての力量を周囲の観客に示すために即座にシェイクスピアの『ヘンリー4世、第1部』第1幕3場のホットスパーのセリフを語ってみせる(Beaumont, Induction, 76-80)。徒弟が演劇を見ることはシェイクスピアの時代からあったが、徒弟が「演じる」ということが演劇作品の外で言及され、さらにそれが広く社会の関心事となることは18世紀の半ばまではなかった。18世紀の俗語を集めたグロス(Grose)の俗語辞典の第2版(1811年)によると、'spout'は「芝居の稽古をする」、spouting clubについては「芝居のさまざまな登場人物の稽古をする徒弟や職人の集まり」(強調筆者)を意味するとし、さらに続けて「稽古をして地方巡業劇団に入る俳優の予備軍を形成する」としている。『オックスフォード英語大辞典』第2版(1989年)によるとspouterが「アマチュア俳優」の意味で初めて使われるのは1760年、spouting clubの初出は1756年となっているが、「18世紀英国・英語圏刊行物データベース」(ECCO)を見る限り、印刷メディアでの初出は、1751年にフランシス・スタンパー(Francis Stamper)がジョン・ヴァンブラー(John Vanbrugh)の喜劇『イソップ』(*Aesop*, 1697年)に書き加えた短い場面「今時の人物」('A Modern Character, Introduced in the Scenes of Vanbrugh's *Aesop*')である。

スタンパーの書き足した場面は短いスキットで、劇中に時事的な話題を織り込み、古くなった喜劇に新しい笑いを添えるだけ的一场であるが、恐らく1751年頃に世間で話題になりつつあるスパウター／スパウティング・クラブについて、その類型の人物であるスパウターと主人公のイソップとのやり取りを通して、新しく出現した芝居に現を抜かず徒弟たちを嗤うものであった。ここでスパウターは無知で自信過剰な法螺吹きとして描かれおり、イソップに対して「物知りのイソップさんともあろう方が、spoutingが何かを御存じないとは、そんなことがあり得るんだ」(8)と言い、実はイソップに「話す技術」を教えに来たという。

スパウター：…イソップさんが弁論家になって寓話を話すつもりだと耳にしたので、身のこなしや歩き方、強調の仕方や姿勢、そのほか弁論術の細々としたことを少しお教えしようと思ってやって来たんだ。

イソップ：なるほど。専門的な言葉をご存じということは、弁論術には相当長けておい

でなのでしょうな。

スパウター：長けている、だって！ まあ、そこそこ詳しいというだけの理由はあるな。2つの（勅許）劇場の俳優たちは、情けない連中でね。実に情けない。実は、あの連中ときたら、しょっちゅう演技を指導して欲しいとか、しつこく言ってくるから困ってるんだ。

イソップ：まさか、そんな話は知りませんでした。

スパウター：いや、それが本当なんだって。でもまあ、そんなつもりはなくてね。教えたりなんかはしないけどね。(9)

さらに、「二つの劇場からは、500ポンドを出すから舞台に出て欲しいって誘われてるが、断ることにしている」と言うなど、スパウターが自分のことを一角の役者のように振る舞う滑稽な様子が描かれる。この短いスキットが重要なのは、印刷メディアに関する限りでは、1751年までにこの小品以外で「スパウター」あるいは「スパウティング・クラブ」といった言葉が出てくるものがないということだ。スパウターやスパウティング・クラブは、デイヴィッド・ギャリック (David Garrick) が活躍する1740年代になって初めて現れるようになると思われるが、スタンパーのこの短いスキットを見る限り、1751年の段階ではスパウターは無害な嘲笑の対象ではあっても、社会的な問題としては認識されていなかったであろう。

その意味で、ロンドンやイギリスの大都市においてスパウターが目立つ存在になってきたことを示す2つのテキストが1756年に出版されているのは注目に値する。そのひとつがアーサー・マーフィー (Arthur Murphy) の『徒弟』(*The Apprentice*) であり、もう一つが芝居好きのための『未発表演劇口上集』(*Original Prologues, Epilogues, and Other Pieces never before printed*) である。

『徒弟』は、当時は俳優であったマーフィーの劇作家としてのデビュー作である。記録によると、ドゥルリー・レイン劇場での初演である1月2日(金)から休演日の日曜日を挟んで1月9日まで7日間連続で上演されたのは当時としては異例の回数であり、その後も1月中旬に5回、1756年内に都合19回も上演され、劇団の演目として1800年までに229回も再演されるなど、劇団のレパートリーの一つとして上演され続け作品であった<sup>6)</sup>。1780年代の宣伝では、「スパウティング・クラブの場面」が時代に合わせて書き加えられていたようで、観客がスパウティング・クラブの滑稽な場を楽しみにしていたのは間違いない。だが、この作品が長く人気を博して19世紀半ばまで再演されたもう一つの理由は、これが18世紀の舞台の主流であった感傷喜劇 (sentimental comedy) のパロディになっており、また芝居好きが高じて旅役者の一座に加わったが一座が解散したために落ちぶれて親元に帰ってきた元徒弟の主人公ディックが、常に自分の行動を『ロミオとジュリエット』などの有名な演劇作

品の登場人物と自分とを重ね合わせて芝居の論理に従って行動したり、会話では有名な演劇作品のセリフを使って話すなど、演劇的な自意識が極めて強いパステーションあるいはパレスクとして完成された作品であったからだろう。その意味で、『徒弟』は、同時代の演劇に慣れ親しんだ観客を対象にした、演劇的にはかなり洗練された作品なのである。

しかしながら、初演時に人気を博した主な理由は「スパウター」や「スパウティング・クラブ」という題材の時事性にあり、元々はスパウターであった主人公のディックが劇中で訪れるスパウティング・クラブの場面が、実際にはそのようなところを訪れる機会のない多くの観客にとって、実在のものを再現していると見做されたからであった。このことは当時の代表的俳優であり劇場経営者でもあったギャリックが書き、マーフィー自身が語った前口上の中ではっきりと述べられている。その口上の一部を見てみよう：

我らが芝居の主人公たる一人の若者——運命により希代の愚か者  
と定められた者——その者の芝居狂いは、運命の力をもってしても  
抑えることかなわず、親方との徒弟契約によっても縛ることはできず。  
かくも愚かなドン・キホーテたちの集まるところあり。  
その名はスパウティング・クラブ——大層ごりっぱなお楽しみ！  
そこでは、徒弟たちの演じる王が——誰もいない通りに武器を持って命じ、  
ブルータスが、細い蠟燭を手に、真夜中の暗闇にぎよとして目を凝らす、  
そんな彼らが昼間に演じるのは——毛織物商。  
父王ハムレットの亡霊は、片手を握りしめて、偉そうに進み出ると  
「聴け、聴け、おお、聴け！」——という叫び声をあげる。  
その声に恐怖するのはデンマークの王子——実は若いタバコ屋の店員。  
亡霊も、その白い装束を脱いで、  
立ち上がると——現れ出るは小間物屋。  
……

街中の至るところで、こんなバカバカしい光景を目にすることでしょう。  
私自身も目にしたことだが——なんら珍しいものではない。  
嘘を言っているとおりなら、他にも証拠はございます。  
周りをご覧頂きたい——ほら、観客席にも芝居狂いの若者がちらほらと。  
この主人公たちの行動をやめさせ、俳優としての榮譽を奪い取り  
この者たちを正気に——そして勤める店に——引き戻すために  
罪のない笑いを起こすことだけが、私の目的であります。

(Murphy 11-12; Prologue 19-31 行, 35-41 行)

このギャリックによる口上は、当時話題になり始めていたスパウティング・クラブとは何かを簡潔にまとめたうえで、当たり前になりつつあった徒弟たちの間での流行について、恐らくそのような場所には縁のない多くの観客に紹介しているのだ。しかし、その一方で劇場の最も安いギャラリーの2階席（アッパー・ギャラリー）で観劇しているスパウターたちにとっては、憧れの名優ギャリックの手による口上で自分たちが認知されていることを示す重要な証拠でもあった。また、マーフィーがこの作品を出版するにあたって前書きで、「題材であるスパウティング・クラブが実際に存在することは、前口上の作者によって見事に示されており、観客は押しなべてそのとおりであると即座に思った」とあるように、この口上により、マーフィーが劇中で描くスパウティング・クラブの様子が、現実のスパウティング・クラブを映し出すものであるとみなされる結果となった。

実際に第2幕第1場のスパウティング・クラブの場は、劇のプロットとは直接関係はない。久しぶりにクラブに顔を出して「天才」と言って主人公が歓迎される場面（34）に続いて、プロの俳優気取りの素人俳優たちの滑稽な演技自慢がこの場面の中心になっている。それぞれアイルランド、スコットランド、イングランド出身のスパウター・クラブの会員3名が、アイルランド訛りやスコットランド訛りのままで、相手には頓着せずにシェイクスピアのマクベス、オセロ、父王ハムレットの亡霊のセリフを語る場面（36）では、セリフのコンテクストと関係なく自分の演じたい役柄のセリフのみを演じる可笑しさを描いている。それに続くやり取りは次のようなものだ。

ディック：おい！ 頼むよ、亡霊をやるにはもっと太ってないと。

全員：そうだ、そうだ。亡霊の役は劇団で一番太っている役者がやるのが道理ってもんだ。

3人目の会員：父王ハムレットの亡霊役で舞台デビューするつもりなんだけど、ひとつちょっと悩んでいることがあってね。観客って、知っての通り、舞台デビューした俳優にはいつだって拍手喝采するよな。で、知りたいことは、俺が舞台にたって、観客が一斉に拍手喝采となった時に、一階席とボックス席の両方の客にお辞儀するものなのかどうかってことだ。

アイルランド人：そりゃ絶対そうしなきゃ。それでもし（演技がひどくて）「地獄に落ちろ」ってなじられても（if you are damned）、亡霊だけに地獄はお馴染みの場所っていうことになるな。

2人目の会員：さて、みなさん、これが本当の死に方だ——（毛布を広げる）俺は負傷したと思ってくれ——（倒れる）

おお！ アルタモント、君の剣の腕の方が僕よりも上だった。

君の勝ちだ——（Murphy 37）

引用の最後で本当の死に見せるという男が、当時人気のあったニコラス・ロウ(Nicholas Rowe)の悲劇『美しき悔悟者』(*The Fair Penitent*)で、アルタモントの婚約者と関係を持ったロザリオが殺される場面を演じているつもりなのだが、前後の脈絡なく演じる姿は滑稽というほかない。19世紀初頭にはこの場面で、剣で刺されたにもかかわらず、死なずに延々と芝居を続けた役者が非難されることがあったが、恐らくここでも倒れてから死ぬまでが「見せ所」であり、不要な間を取りながら苦悶するさまを演じていると思われる。このようにスパウティング・クラブの会員たちが勝手に演じては拍手されたり批判されたりという雑然とした場面は、虚構としての多少の誇張は差し引くとしても、先の『イソップ』あるいは同じ年に出版された後述の『未発表演劇口上集』とは異なり、スパウターやスパウティング・クラブを嘲笑するようなところはほとんどない。

ギャリックが経営陣にも入っていた『ロンドン・マガジン』(*The London Magazine*)の1756年1月号の巻頭には、宣伝を意図した作品概要のような『徒弟』の劇評とギャリックの書いた前口上の全文が掲載されているが、このスパウティング・クラブの場面についての以下のコメントは興味深い。

訛りの強い北ブリテン人がセリフ術(eloquence)の一例を演じてみせたり、アイルランド人が『オセロ』でのセリフ術を語るというアイデアはなかなか面白いのだが、この場面がこの笑劇の一番面白い場面だと言われてとずっと待たされていただけに、総じて期待したほど面白くはなかった。("Some Account of the new Farce" 4)

確かに、この笑劇の展開には必ずしも必要ではないスパウティング・クラブの場面が、前口上のせいで必要以上に注目を集めることになったことが裏目に出たのは間違いないだろう。『ロンドン・マガジン』の評者は、「この風刺劇が、舞台に立つ人間の手によるものでなければ、恐らく俳優たちはこの作品が自分たちの職業を侮辱するものとみなしただろうと思わずにはいられない」(3)とも指摘しているが、この作品自体にスパウターを批判するという意図が希薄なのは、作品を読めば(あるいは観れば)明らかである。むしろこの劇評を装う宣伝記事の中で、『徒弟』にスパウティングへの批判があるかのようなことをわざわざ書き加えているのも、演劇に対して批判的な一部の人々からの批判を回避するための予防線にすぎないのだ。そのことは、上に引用した前口上の最後で、作品の目的がスパウターにスパウティングを止めさせるのが目的であると謳ってはいるが、それはあくまでもこの芝居への批判を避けるための方便にすぎないのと同様である。その意味で、この作品は後で取り上げるスパウターやスパウティング・クラブに批判的な新聞記事等とは正反対のものなのだ。

スパウターが舞台上に登場する演劇作品は、『徒弟』以外にはない。しかしながら、セリフ劇の上演が許されていなかった非正規劇場などでは、スパウターを取り上げたスキットは演

じられていたようである。1770年代から80年代の新聞を確認すると、スパウティング・クラブのスキットが「滑稽なスパウティング・クラブの描写」(a humorous description of a Spouting Club) などとして頻繁に上演されたことが確認できる<sup>7)</sup>。例えばギャリックが舞台を去る1776年5月から8月に、当時のロンドンのプレジャー・ガーデン (Pleasure Gardens) の1つであるメリボーン (Marybone Gardens, 後の 'Marylebone') で、『世界の縮図』(World in Miniature) と題するさまざまな演目を集めたショーが公開されていた。これは普段はオペラの上演などを行う庭園内の屋内施設で行われたものだが、新聞広告を見ると、その演目の中に「スパウティング・クラブ」があり、続けて「この出し物では新しいミニチュアを多く取り入れる」(図版1)<sup>8)</sup> とある。この『世界の縮図』は、第1部に「オーケストラを精巧に再現したもの」とあるように、すべての装置がミニチュアで人形が演じるようになっており、この「スパウティング・クラブ」も人形劇の1つであったようだ。サンドによると、引退を前にしたギャリックと関係が悪化したチャールズ・ディブディン (Charles Dibdin) が、ギャリックを嗤うためにギャリックの人形を新たに製作させ、この「スパウター・クラブ」に登場させたい (Sand 116-118)。ギャリックを風刺するような演目であったのかどうかについては、台本等が残っていないために確認はできないが、スパウターやスパウティング・クラブを題材にしたスキットが、こういった18世紀のロンドンで流行していた娯楽施設の出し物になっていたのだ。

スパウティング・クラブやスパウターを題材にしたスキットが、演劇上演が法的に認められていない非正規劇場で演じられ続けていたことを窺わせるのが、1797年のロイヤルティ

May 28, 1776. [Pri

MARYBONE-GARDENS.  
**T**HIS present Tuesday, May the 28th, will be exhibited a miscellaneous Entertainment, called **THE WORLD in MINIATURE.**  
**PART THE FIRST,** An exact Representation of the Orchestra: In which will be performed several favourite Songs.  
**PART THE SECOND,** A Serenata, in the manner of the Italian Intermezzo, called, **THE MILK MAID,** the **SHORTING CLUB,** in which will be introduced many new Imitations; and the **RECRUITING SERJEANT.**  
**PART THE THIRD,** **SHYLOCK'S PLOT,** or **THE COMIC MIRROR BESEIGED;** and the **CATCH CLUB,** in which will be introduced Catches from the Duenna, particularly for the first time, "The bottle's the fun of our table."  
 After which will be  
**THE WELCOME HOME,**  
 In which will be introduced the Naval Review.  
 The whole to conclude with  
**A FIRE - WORK.**  
 Admittance Two Shillings and Sixpence.  
 Doors to be opened at Six, and the Concert. to begin at Seven.

図版1 *The Morning Post and the Daily Advertiser*, 28 May 1776 に掲載された広告。PART THE SECOND の3行目に大文字で SPOUTING CLUB という演目がかかれている。ほかにも第3部では、当時『ベニス商人』のシャイロックを演じて人気であったチャールズ・マックリン (Charles Maclin) の舞台のパロディを思われる演目がある。

THE ROYALTY THEATRE  
Having undergone a General Repair and Decoration,  
WILL BE OPENED  
ON MONDAY NEXT, November 27, 1797,  
Under the Direction of Mr. MACREADY,  
With the following Entertainments:

The First part of that favourite and fashionable Pasticcio,  
COLLINS'S BRUSH  
FOR RUBBING OFF THE RUST OF CARE.  
By the AUTHOR:

Who, though long retired from the Public Scene, comes forward to support the interest of his Friend.

SYLLABUS.—The Bowdler's Bumpkin—An Exordium: The Text. The Rum Puncheon Preachment. Song—Poor Tom's Parody. Country Theatres. Country Audiences and Critics. Striking Actors. Spouters and Spouting Clubs. Mr. Garrick and the Stage-struck Taylor. Bochers and Butchers of Blank Verse. Blundering Parish Clerks. Irish and English Bulls. Song—Ginlet-eyed Katty. Tragedy Puppet. Irish Echoes. Snuffing Tragedians and Stage Heroes with Burrs stuck in their Throats. Strolling Veterans at War with Common Sense, and Buffoons transformed into Speaking Limb-pieces. Conclusive Song—Old England's Deathless Glory.

Previous to the Brush will be presented, a new Serio-Comic Spectacle, interspersed with Dance, Song and Action, called  
THE CONTRAST;

Or, A PEEP AT THE NORE AND THE TEXEL.

After the Brush will be presented a Musical Tale, called  
AMURATH THE FOURTH;  
Or, THE TURKISH HARAM.

After which will be performed,  
FEATS OF STRENGTH AND AGILITY,  
(Superior to any ever before exhibited in this Kingdom.)  
By Mr. MORTZ.

To which will be added, a new Pantomime Entertainment, called  
THE FESTIVAL OF HOPE.

Boxes, 4s. Pits 3s. First Gallery, 2s. Second Gallery, 1s.  
Nothing under Full Price will be taken during the Performance.

The Doors to be opened at Half-past Five o'Clock, and to begin precisely at Half-past Six.

Places for the Boxes to be taken at the Stage Door.

In a few Days will be announced, a Benefit Night for the Widows and Orphans of the Brave Seamen who fell in the Glorious Action of the 11th October 1797.

図版2 1797年11月24日に *The True Britain* に掲載されたロイヤルティ劇場の広告。全く同じものが、11月28日付の *The Star and Evening Avertiser* にも掲載されている。

劇場の広告である。非正規劇場では、5幕のセリフ劇でなければ上演しても違法ではなかったため、バーレッタ (burletta) と呼ばれる歌やダンスを中心とした演劇的な作品を、短いスキットや歌やダンスなどの演目と併せて上演することが常であった。1797年11月に掲載されたロイヤルティ劇場の新聞広告(図版2)は、『徒弟』のスパウティング・クラブの場面だけを独立させたようなスキットが18世紀末にも上演されていたことを教えてくれる<sup>9)</sup>。図版2の中央の演目(SYLLABUS)の下2行目の終わりからを見ると「田舎の劇場と田舎の観客と批評家——素晴らしい俳優たち——スパウターとスパウティング・クラブ——ギャリック氏と舞台の虜になった仕立て屋」とある。ここにあげた5つの言葉はスキットの内容を示すようになっており、この順番で1つのスキットが進行したと考えるべきであろう。一般にスパウターたちにはギャリック崇拜に近い傾向があり、両者を結び付けて考えることが珍しくはなかったが、これもギャリックに憧れる田舎から出てきた徒弟がスパウター・クラブに通うということを主題としたスキットであろう。当時ロンドンで10以上あった大小さまざまな非正規劇場の上演記録はほとんど残っていないが、スパウターが大きな社会的問題として取り上げられなくなっていた18世紀末においても、滑稽なスキットが演じ続けられたことは、「スパウター／スパウティング・クラブ」という18世紀後半に特有のポピュラー・カルチャーを考える上でも注目し値する。そして、このポピュラー・カルチャーを支えていたのが、スパウターのための作品抜粋集であった。



### 3. 拡散するスパウター／スパウティング・クラブ

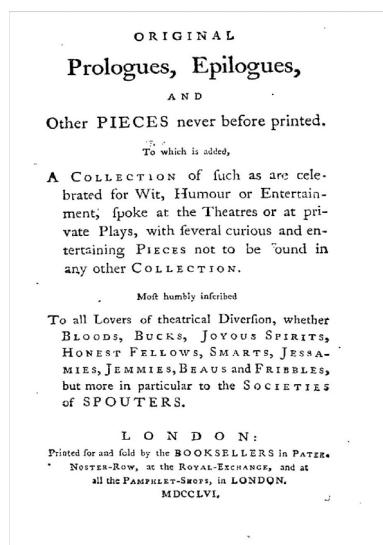
#### 3-1. スパウターのための口上集

スパウティング・クラブでは、どのようなものを演じた（あるいは朗読した）のかを考える際に重要になるのが、彼らのために出版された口上集やセリフ集である。スパウターたちの多くがそういった印刷物を購入して使用していたのかは確認できないが、スパウター向けに出版された口上集などの数は1750年代から1800年までの間に20種類を超え、特に1770年代から80年代にかけてスパウター向けの冊子あるいは書籍の出版が集中している(Ritchie 46-47)。こういった冊子を使って職業作家の書いた優れた文章を覚え、感情をこめて語るスパウティングという行為は、道を誤って俳優になる者もいたであろうが、ある程度の教養を持っていたと思われる徒弟や見習いにとっては教育的な効果も併せ持つ有意義な娯楽であったことは間違いない<sup>10)</sup>。

『徒弟』が上演された1756年に出版された『未発表演劇口上集』(*Original Prologues, Epilogues, and Other Pieces never before printed*) は、スパウターが使用することを念頭に、演劇が上演される前と後に、特定の上演のために俳優や劇作家が新たに書いた前口上や納め口上を集めた最初のものである。60ページ足らずの冊子の表紙の下部には、「謹んで、すべての演劇愛好家のために捧げる」(Most humbly inscribed/To all Lovers of theatrical Diversion) として、その「愛好家」がどのような人間なのかを次のように説明する。

血の気の多い連中、墮落した者、浮かれた者、利口ぶる者、馬鹿正直な奴、小賢しい者、抜け目ない洒落者、気障な奴、伊達男、女々しい洒落者などだが、とりわけスパウター同好会のために。

編者は、わざわざ「スパウター」(SPOUTERS)を、他よりも目を引くように少し大きな活字印刷し、こういった口上集の需要がスパウターの間で高まっていることを意識していたのは間違いない(図版3)。このことは、この時期にスパウターが集まって芝居の口上などを朗読する会(societies of spouters)が増えてきたことを示す一方で、『徒弟』では当たり前のように使われていた'spouting club'という言葉が、この段階では必ずしも定着していなかったことが窺われる。後述するように、スパウターのために特別に編纂されたギャリックの口絵付きの口上集が数多く出版されて版を重ねるようになるのは1770年代になってからであり、1756年に出版されて以降10年間は同様のものは見当たらない。形式としては以前からある弁論術の教材やジョーク集といった引用集に近いのだが、後述するスパウター向けの口上集一般に見られるような俳優の口絵もないが、芝居好き向けの間でこのような口上集



図版3 *Original prologues, Epilogues, and Other pieces never before printed.* (1756) の表紙。

の需要を少なからず期待して出版されたのだろう。また、こういった小冊子を買うだけの経済的余裕がある徒弟や見習いなどのスパウターがすでに一定数いたことも想像できる。

他方、上に引用した「想定する読者」への呼びかけからも明らかのように、この口上集のスパウターにする姿勢は肯定的なものとは言い難い。そのことは「読者へ」と題された前書き (iii-ix) でも明らかである。この匿名の編者は次のように書き始める。

この手のものを演じる方々は、目を引くような目新しいものがなければ（そうなるとかかなりの価格になってしまうので）、たいいてい質よりも量を重視するものです。そこで、大方の読者、つまり、とりあえず良識や機知はさておき、新しいものならば何でもありがたがるような読者の方々の好みに合わせて、そういった読者に喜んでもらえるような冊子になるよう精一杯努めました。

……要するに、この冊子を出版する第一の理由は小銭を稼ぐことであり、またとにかく新しければなんでも喜ぶような、そんな流行を追いかける読者に楽しんで頂くためにこの冊子を用意いたしました。（*Original Prologues* iii）

そして、この冊子は誰のために編集したのかを説明するにあたって、1753年10月20日付の新聞 *The Adventurer* からひとつの手紙を引用する。その内容はヨークシャーの郷土と思われる家庭の息子がロンドンに出てきて最後は墮落して財産を失う教訓的なものであった。役者の真似をして仲間を喜ばせていたが、みんなが飽きてしまい受けなくなると、仲間を面

白がらせようと他人に度の過ぎた悪ふざけをし、最後はその罪を問われて身を持ち崩すというものである。つまり、この口上集自体は当時としては目新しいものであったが、編者が主張する「出版の意図」はスパウター達を喜ばせるためではなく、むしろ芝居のまねごとをすることの愚を戒めるためだというのだ。

しかし、このような読者への呼びかけにもかかわらず、編集された口上など全26編の内容は極めて穏当なものであり、出版された時代に劇場に通った者ならば馴染みのある作品の口上を中心に集められている。中でもシェイクスピアの作品への口上が5編、さらに「シェイクスピアを称えて」というタイトルでミルトン (John Milton)、ベン・ジョンソン (Ben Jonson)、ドライデン (John Dryden)、スティール (Richard Steele) 等による韻文を6編も載せ、さらに口上20編のうち7編はギャリックが書いた、または話した口上であった<sup>11)</sup>。18世紀はギャリックによってシェイクスピア崇拜が確立する時代であることはよく知られているが、それがこの口上集にも見て取れる。

ここで疑問に思えるのは、なぜ素人俳優あるいは俳優志望のスパウター向けのテキストに、戯曲にあるような対話がないのかということではないだろうか。一つにはギャリックへの崇拜ともいえる憧れがスパウターには強くあったため、ギャリックが書いたあるいは演じた口上が好まれたという指摘はある程度は正しいだろう (Ritchie 53)。しかし、それ以外の作家や俳優によるものが多いのは、前口上と後口上は、劇中の登場人物か何か他の役柄として (in the character of) 観客に向けて語るものであり、そこではある種の演技が求められていたが、同時に口上には複雑なコンテクストがないため演じやすいということがあった。また、スパウティング・クラブの記事が繰り返し描く独りよがりなスパウターたちにとって、自分一人だけで完結する口上は、一人で練習ができることもあるが、何よりも他の下手なスパウターに邪魔されないで演じる機会を与えてくれるという点も重要であった。スパウター向けの冊子を出版することへの言い訳のような前書きと、既存のジョーク集のフォーマットに従って編集されたまともな内容との齟齬は、このような口上の出版を正当化する方便とも解釈でき、1750年代半ばのイングランドにおけるスパウターに対するアンビバレントな姿勢を如実に表している。

スパウティング・クラブに表紙で言及している2冊目の例が、1765年の『完璧なロンドンの道化、あるいは才人の友』(*The Complete London Jester or Wit's Companion*) というジョーク集である。タイトルに続いて、その内容として次のように書かれている。

二つの大学、二つの劇場、ホワイト・チョコレート・ハウス、ベッドフォード・コーヒー・ハウス、さらにはロンドンとウェストミンスターにあるスパウティング・クラブや選りすぐりのスピリッツ・クラブなどから最近漏れ聞いた、ありとあらゆる楽しい話、滑稽な話、知識、見識といったものを収録。

この140ページを超える書籍の巻頭で4ページにわたって、同席した人たちに物語や冗談を話すには、教育で身につける知識とは別の「物語を話す技術」(The Art of Story-telling)が不可欠で(3)、「聞いていて楽しい語り手」(Delightful Story-teller)になるためにどうすればよいのか、その心構えが抽象的にはあるが一応は書かれている。この本自体は、スパウターのために編集されたものではないが、大学やロンドンの劇場、さらに当時人気のあったコーヒーハウス等と並んでスパウティング・クラブの名前が挙がっている点は興味深い。また、「本書は、好感を持たれる話し方を教え、ウィットに磨きをかけてくれるので、男性にも女性にも娯楽と教養」を提供するとあり、少なくともスパウティング・クラブは教養のない若者が集まる好ましからざる集会ではなく、ウィットに富む才人が覚えても良い滑稽な話や冗談、歌や物語などの出所のひとつとして挙げられているのである。

1770年代に急速に増えるスパウター向けの口上やセリフ集の中でも最も人気があったと思われるのが、1770年に出版された『スパウターの友』(*The Spouter's Companion*)である。確認できるだけでも内容は同じで図版だけが異なる版が1772年以降に同じ出版社から出版されたほか、1790年と1796年にはそれぞれ違う出版社から副題と内容の異なる『新版スパウターの友』という類似した口上集まで出版されているほどであった。『スパウターの友』は、その副題が「演劇忘備録」(theatrical remembrancer)であり、まさに口上やセリフを覚えるために編まれたことがわかる。これまでの有名な口上を集めたという意味では、一見したところ他の口上集と大差ないのだが、この100ページ強の冊子の注目すべき点は、巻頭に「劇場の内側を明かす」(*The Playhouse Displayed*)という韻文を配し、演劇や演技がどうあるべきかを述べている点である。その韻文は次のように始まる、

演劇の中に人生の縮図を目にするのであるから、  
劇場とは小さな世界でなくてはならぬ。  
そこでは、経験したことのない感情を装うこともあれば、  
冷淡な人間が、情に厚い人間に悲しみかたを教えることもある。  
悲しい状況に置かれている人間が、  
楽しく浮かれ、陽気に振る舞うことがある。  
満ち足りた者、思慮に欠ける者、自惚れ者が  
謙虚さ——熟慮——苦悩を装うことがある！  
俳優は、このように演じ続け、実際とは逆を装えばよい  
俳優が演じるものに意義を見出すのは我々なのだから。

(*The Spouter's Companion* 1)

このように演劇の虚構性を述べた後で、当時ギャリックが演じて人気のあったシェイクスピア

アなどの作品の例を挙げて、悲劇や喜劇の登場人物を演じる際に注意すべきことを述べ、次のように締めくくる。

常に自然を従うべき原理として、  
 怒り、悲哀、愛情、嘲りを演じること。  
 感情を操るには、自然が法則を教えてくれるから、  
 俳優は、自然から教訓を引き出すべきである。  
 そして、俳優が笑おうが、弱々しく哀願しようが、声を荒げようが  
 観る者それぞれがどう判断するかは、自然が決めるはずである。(3)

この全78行からなる韻文で説明していることは、演劇論、演技論と呼ぶには極めて素朴なものである。しかしながら、これまでの口上集が、ひどい場合は前書きや序文もないままに、口上だけを掲載していたのに対し、ここではスパウターへの演技の助言を、演劇とはどうあるべきなのかという理念とともに曲がりなりにも提供している点から考えると、劇場での記憶を基に憶測から我流で読み上げるのではなく、何等かのルールに従って「演じる」ことの重要性を、想定された読者であるスパウターが意識していたのだろう。次節でも見るように、新聞などで報告されるスパウティング・クラブの様子は『徒弟』で描かれたものを繰り返しているものもあるが、スパウター／スパウティング・クラブの演技の質の変化が70年代になって意識され始めていることがわかる。また、『スパウターの友』が他の口上集と異なるのは、後半に幕間劇として「政治好きな床屋」(The Political Barber, 94-98)という2人で演じるスキットが掲載されていることと、最後に「スパウターズ・メドレー」(Spouter's Medley, 100-104)というタイトルで有名な喜劇や悲劇のセリフが2行から10行程度、作品名とともにまとめてあることである。『徒弟』の中で主人公のディックが有名な芝居のセリフを抜き出しては会話で使ったように、「スパウターズ・メドレー」には44の作品名と有名なセリフのみが列挙されており、どういう状況で誰が言ったセリフなのかは、読者であるスパウターが知っている、あるいはセリフのコンテキストは問わないということなのだろう。つまり、しゃれた科白や演じたいセリフのみを集めたということである。そう考えると、この『スパウターの友』は、熱心なスパウターを読者に想定はしてはいるが、プロの俳優を目指すようなスパウターに向けて書かれたものではないのだろう。

### 3-2. 俳優になるためのスパウター向けコレクション

その意味でスパウター向けの出版物で最も演劇的、あるいは俳優志望者向けなのが、1774年に出版された『情感豊かなスパウター』(*The Sentimental Spouter*)である。「若い俳優の友」(Young Actor's Companion)という副題を持つ本書は、他の口上集の多くが1シリ

ングであるのに対して、1 シリング6 ペンスと少し高額ではあるが、他の口上集との違いは次のような広告の文言にもよく表れている。

… 身振り、迫力ある表現、表情などについて決まっている規則を収録しており、この規則にきちんと従えば、鑑識眼のある教養ある芝居見巧者 (refined admirer of theatrical performances with taste of discern) を魅了し、作者の意図や考えを適切に際立たせる良識を備えることができるようになり、拍手喝采をうけること請け合いです。  
(*The Morning Chronicle*, 1 April 1774)

この文言に続いて「ドゥルリー・レイン劇場の俳優による」と書いてあることから明らかに、プロの俳優を目指すスパウターに向けて書かれたことが強調されている。

16 ページに及ぶ前書きは、どのように演じるべきかについてかなり具体的に説明しており、当時の演技法の一面を知る重要な手がかりでもある。「詩人は生まれながらのものだが、弁論家には学んでなれる」という格言めいた言葉を掲げ、教会の説教壇、法廷、そして舞台で求められる弁論術では、耳に心地よく抑揚のある声、ぎこちなさのない身のこなし、そして不快ではない外見、あらゆる感情を感じられる心と強烈な感情も表現できる顔つきなどがもとめられるとする (i)。

この前書きの前半では、書かれたものを声に出して読む際に気を付けるべき事柄について、詩篇第 19 編や日常的な短文を使って説明している。特に、「よほどのバカでなければ、自分らしい自然な言葉を使えば、適度な分かりやすさで、その文にふさわしい強調をして、相手に自分の気持ちを伝えられるものである」として、セリフの話し方について短い文 “Did you like him well enough?” とその問いへの返答を例に挙げ、どの単語を強調するかで意味が変わってくることを説明している点など、一見理にかなった点も多いように思われる (iv)。ところが舞台でのセリフ術について論じる vii ページ以降は、少し様相が変わってくる。ここでは、さまざまな感情がどのようなもので、いかに表現するべきかを詳細に論じ、それぞれの感情を表す例として、ジョセフ・アディソン (Joseph Addison) の『ケイトー』 (*Cato*, 1713 年)、トマス・オットウェイ (Thomas Otway) の『護られたベニス』 (*Venice Preserv'd*, 1682 年)、ナサニエル・リー (Nathaniel Lee) の『セオドシウス』 (*Theodosius*, 1680 年)、そして『オセロ』といった有名な悲劇の独白を引用する。ここでは「嫉妬」の表現方法について、その一部を長くなるが見てみよう。

嫉妬心とは、愛情、憎悪、希望、恐怖、恥辱、不安、猜疑心、悲哀、哀れみ、妬み、自惚れ、怒り、残虐さ、復讐心、狂気、そのほか人を苦しめるあらゆる感情が混ざり発酵したもので、人の心を掻き乱すものである。そこで、嫉妬心をうまく表現するには、こ

のようなさまざまな感情すべてを、次々と、あるいはそのうちのいくつかを同時に、正しく再現できなくてはならない。落ち着きがなくなったり、怒りっぽくなったり、考え込んだり、不安そうにしたり、ほんやりしたり、といった様子によって嫉妬心が表に現れる。ときには嫉妬心が突然不満となって溢れだし、泣きだす。それから、それでもなんとかなるだろうという一筋の希望が顔に表れ、ほんの一瞬だけ微笑みを浮かべる。しかし直ちに、顔全体が暗い憂鬱で曇り、再び恐ろしい疑いの気持ちとぞっとするような妄想で心がいっぱいになったことが表情にでる。そのとき、両腕は胸の前で組み、両手のこぶしを強く握り、血走ったギョロギョロと動く目からは激しい怒りの感情が出ている。セカセカと忙しく動き回り、激しい波や風に弄ばれる嵐の中の船のように、落ち着くことがない。また少し落ち着きを取り戻し、疑っている女性の魅力に思いを馳せる。想像の中で、彼女は日が昇り始めた朝焼けのように美しい。ところが、怪物を生み出す妄想の中では、その美しさとは裏腹に、彼女の不実なさまが浮かび上がってくる。そして、拷問台に掛けられた男のように、大きな呻き声をあげる。残酷な拷問で関節が引き裂かれて、手足のあらゆる関節がちぎれ、臍という臍が壊れたかのように。それから地面に体を投げ出し、敷石に頭を打ち付ける。恐らくその後は、地獄から飛び出してきた復讐心のような顔つきと所作で急に立ち上がる。(xii-xiii)

このあと武器を手に取り、不実な相手を殺し、自ら命を絶つという説明が続くのだが、一つ一つの感情をどのように捉えて演じるべきかを詳細に説明していることが分かる。感情に関する説明が往々にして比喩的で抽象的になりがちなのに対して、それに見合った身体的表現があまりにも具体的で形式的、些か陳腐に思えるだろう。腕を組んだり、目をギョロギョロとさせたり、最後は地面に倒れ込んで頭を打ち付けるなど、感情と身体表現との組み合わせがパターン化されているような印象を受けるはずである。このような感情の好例として、『オセロ』の第3幕第4場 438-456 行目を、間に入るイアーゴのセリフを省いたオセロの独白の形で引用しているのだが、ここで紹介される演技術は独白のような感情の流れが中断しない形のものに当てはめやすいためであろう。

こういった演技観が前提としているのは、感情とその身体的な表現は文化や時代を超えて普遍的なものであり、悲劇の中で描かれる個々の感情を演じるには、俳優は決められた身体表現や表情のフォーマットに従うことが必要であるとするものだ。このような演技観はエリザベス朝時代に主流であり、王政復古以降も 18 世紀中頃までは、韻文で書かれた悲劇の上演でも引き続き採用されていた。それは、主要な悲劇の役柄は主要な俳優が受け継ぐという前提があったからだ。実際には、ギャリックが華々しいデビューをするまでは一流の悲劇俳優とされたジェイムズ・クイン (James Quin) のように優れた俳優は、形骸化した演技のパターンや台詞回しを役柄に合わせて修正し、批評家や観客から高い評価を受けていたのだ

が、二流の俳優ではそれは難しく、またクインの場合であっても、登場人物の解釈という点では、従来のものを踏襲することが暗黙の了解としてあったのだ。1741年2月にチャールズ・マクリン (Charles Macklin) が『ベニスの商人』のシャイロックを、同年10月には当時は全く無名であったギャリックが『リチャード3世』の主演を演じて以降、とくに1750年代から70年代にかけてギャリックに代表される「自然な演技」がロンドン劇壇において主流となっていった (Stone and Kahl 23-51; Campbell 178-190)。それは同時に、例えば、それまでは嘲笑されるべき滑稽な役柄であったシャイロックの解釈を大幅に変更したマクリンのように、主要な役柄についてこれまでとは異なる解釈の可能性を開くことにもなった。そのように考えると、1774年に出版された『情感豊かなスパウター』に掲載された前書きが説く俳優への助言は、自然な演技を代表するギャリックが率いるドルリー・レイン劇場の俳優が書いたという割には、少なくとも感情表現のありかたとその基になる役柄の解釈については、古臭いという印象が否めないだろう。しかしながら、ギャリックの演技の表層を真似て楽しんでいた大半のスパウターにとって、真似るヒントになったことは想像に難くない。

この『情感豊かなスパウター』が他の類書と大きく異なるのは、前書きで独白の演じ方・語り方しか述べていないにもかかわらず、集めている例が対話を含む3ページ前後のものが大半であり、引用した箇所について作品名以外に何幕何場かを明記してあり、独白であっても前後関係がわかるように作られていることだ。スパウター向けの印刷物の大半が、戯曲のセリフを少し収録していても、基本的に口上集の体裁をとっていたのに対して、この本は登場人物の対話を演じることを念頭に編集されているのである。また、収録した作品は、『ロミオとジュリエット』や『ハムレット』で始まり『オセロ』で終わる構成になっているが、『美しき悔悟者』などの当時人気のあった悲劇や歴史劇以外に、ジョージ・ファーカーク (George Farquhar) の喜劇『伊達男の策略』 (*Beaux Stratagem*, 1707年) の第1幕を4ページにわたって引用しているなど、今回筆者が確認した類書の中では、他に例をみないものとなっている。その意味で、実際に舞台上で芝居を演じる俳優を目指すスパウターに向けた、文字通り「若い俳優の友」であったのだ。

一方で、スパウター批判の一つが「俳優になって身を持ち崩す」ことであることを思えば、演技法も教授するという本書が批判されるのは当然であろう。1774年の後半に出版された『マンスリー・レビュー』の辛辣な書評はその典型である。この雑誌の「マンスリー・カタログ、その他」の第34項には、本書の目次を簡単に載せた後で次のような評が書かれている。

我が国の読者のみなさまにどうしても申し上げておきたいのだが、スパウターとは、大体が日雇い職人か理髪店、仕立屋、その他の職人の徒弟であって、親方や親が悲嘆にく



れるのをよそに、週に一度集まってはビールをがぶ飲みして、あのギャリックという怪しからん男の話し方や所作をまねしている輩のことである。このギャリックという男、プロシアの国王よりも質の悪い人物である。——センチメンタル・スパウターとは何であるのかは、わからずじまいである。この出版物について言えば、表紙を見れば、本の中身はもちろん、そのくだらなさ、著者の程度も十分に分かる。(The Monthly Review 486)

中身には具体的に触れない悪意ある書評と言わざるを得ないが、ここから透けて見えるのは、後述するように徒弟が俳優になる可能性に対する不安であり、若者に道を誤らせる「質の悪い人物」として、本文中では言及されることのないギャリックの名前をわざわざ出している点は興味深い。

その背景には、1770年代から80年代に出版された口上集あるいは抜粋集が、2、3の例外を除いてほぼすべての口絵にギャリックの絵を載せていたことが挙げられる(図版4、5、6)。一般に、スパウターとはギャリックの崇拜者であり、スパウティング・クラブでは、ギャリックの演じた口上や有名なセリフを、スパウターたちはギャリックのように演じることを楽しむ連中なのだと一般に理解されていたからだ。実際には、図版5のように、ギャリッ



MR GARRICK in the Character of a DRUNKEN SAILOR  
Spouting the Prologue to BRITANNIA in MASQUE.

図版4 *The Spouter's Companion* (1770) の口絵。酔っぱらった船員の姿で、仮面劇『ブリタニア』の前口上を読むギャリック。



図版5 *The Spouter's Companion* の第2版 (1772) では口絵だけがトマス・キング (Thomas King) になっている。

クの経営するドゥルリー・レイン劇場でギャリックの次の立場にいたトマス・キングを口絵で描くこともあったが、その数は圧倒的に少なかった。1741年10月にギャリックがロンドンのグッドマンズ・フィールズ・シアター (Goodman's Fields Theatre) でリチャード3世を演じて衝撃的なデビューを果たした後、翌年からはドゥルリー・レイン劇場で演じるようになり、さらに47年には30歳の若さでドゥルリー・レイン劇場の支配人となることで「自然な演技」が当時の英国劇団の主流となった。ギャリックの自然な演技を見て真似るスパウターやスパウティング・クラブという言葉が活字として最初に使われたのが1751年であると考え、スパウティングの流行はギャリックの登場に大きな影響を受けたことは間違いない。また、そのギャリックが引退するのが1776年であり79年に亡くなることを考えると、ギャリックの死後10年ほど経った90年代にスパウティングに関する言及が次第に減っていくことも、ある程度理解できるだろう。しかし、スパウター向けの口上集や戯曲の抜粋集が次々と出版された背景には、演技観の変化以外に、弁論術運動と呼ばれる教育あるいは素養としての弁論術・話す技術に対する関心の高まりがあったことも見逃せないだろう。



図版6 *The British Spouter* (1773) の口絵には、オリバー・ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) の『低く出て勝つ』 (*She Stoops to Conquer*) の前口上を演じるギャリック

### 3-3. 弁論術運動 (Elocutionary Movement) とスパウティング

1773年に出版された『英国のスパウター』 (*The British Spouter*) は、第3節で取り上げたようなスパウター向けの口上集とはいささか趣を異にしている。この口上集では、表紙の長い副題の中で「本書は、若者が話す技術 (the Art of Speaking) を身につけ、その心にしっかりと道徳心を根付かせることを目指している」と明記しているのだ。そして前書きで編者は、芝居の前口上を語る事が如何に有意義であるかを説明して次のように述べる。

悲劇であれ喜劇であれ、芝居の前口上は、その筋書きの本質を余すことなく含むものであり、また同時にその時代に支配的な好みに合わせて、流行りの愚かな行為を厳しく戒めるか、美德を一番引き立つように描くものである。ふさわしい話し方で、最も印象的な比喩を強調して前口上を話すにあたって、人の持つ才能を最大限に働かせる必要がある。そうすれば若者は、言ってみれば、知らないうちに詩を愛するようになり、心地よい詩の描く幻想を心に抱くようになるのだ。 (*The British Spouter* i-ii)

スパウター向けの他の口上集や抜粋集が話す技術を身につけるのに役立つことを謳う、あるいはただ口上を集めただけであるのに対して、『英国のスパウター』では話す技術の効用

として道徳心と文学的な教養が身につくと言うのである。このような考え方の背景には、18世紀後半に活発になる弁論術運動（Elocutionary Movement）の影響があった。弁論術運動はスパウターのような徒弟を対象としたものではなかったが、話す技術についての関心や話す技術を学ぶための文集や抜粋集が数多く出版されていた事実は、スパウター向けの口上集などが、同時代の運動に影響を受けていたと考えてもおかしくはないだろう。では「弁論術運動」とはどのようなものであったのだろうか。

18世紀は上流階級や中位中流階級以上の人々の間では、人前で話すことや朗読に対する関心が高まり、特に18世紀後半には、朗読が社交の場でも弁論術あるいは話す技術が人が当然身につけておくべき嗜みとして重要視されるようになっていた。そのため、従来の弁論術のなかでも、人前で話す、あるいは朗読する技術を身につけるための教科書や教材が数多く出版されていた（Mullini 159-160; Williams 42-43）。こういった運動の方向性を大きく決定づけたのが、話す技術を人格教育の核として英国教育の改革の必要性を論じた1756年出版のトマス・シェリダン（Thomas Sheridan）の『英国教育：あるいは、英国の無秩序の根源』（*British education: or, the source of the disorders of Great Britain*, 1756年）であった。表紙に書かれたその長い副題の中でシェリダンは次のように主張している。

至るところに蔓延る不道徳や無知、誤った嗜好は、現在の欠陥のある教育制度がもたらした当然かつ必然的な結果であることを証明しようとするものである。さらに、話す技術を復活させ自分たちの言語を学ぶことが、この国の害悪を正すにあたって大いに役に立つこと示してみたい。

そして、「チェスターフィールド伯爵への献辞」において、計画を実現するには、「長きにわたって失われている弁論術を復活させ、英語を正しく、確かなものとして定めること」(vi)が必要であるという。ここでシェリダンがいう「英語」は、訛りのない正しい発音で話すことを前提としているのであるが、シェリダンは『弁論術についての連続講義』（*A Course of Lectures on Elocution*, 1762年）の最初の講義で、公の場で話す技術が英国において重要であるにもかかわらず見逃されている点について次のように述べている。

要するに、この国では、うまく人前で朗読するあるいは話すということが、めったに目にする事のない資質の一つとなっているのです。世界中のどの国よりも、人前での朗読や講演が広く行われているにもかかわらずです。うまく朗読したり話したりすることが、国家にとっても社会にとっても、この上なく重要であるにもかかわらずです。それが個人の出世や名誉に、たとえ少しであっても、常に求められるものであるにもかかわらずです。このことは、決して否定しようのない真実なのです。（『連続講義』1）

以上のようにシェリダンは一貫して人前で朗読する、あるいは話す技術が英国社会の基盤となる能力であるとするのである。これは他の弁論術運動の指導者にも共有されていた考え方であった。シェリダンの考え方については極端であるという反応も当時少なからずあったようだが<sup>12)</sup>、話す技術あるいは弁論術を身につけることが英国社会のために役立つという考え方自体は共通するものであった。弁論術運動の指導者のひとりであるジェイムズ・バラ (James Burgh) は『話す技術』(*The Art of Speaking*, 1761年)の中で、次のように述べている：

国会議員になることがないから、裁判所で弁護することがないから、舞台上立つあるいは教会の説教壇から話すことがないからと言って、若者は自分の母語を学ぶ必要がないとお考えになるのか？ 友人と一緒にいる際に、詩あるいは本や新聞の一節を声に出して読むことは決してないのだろうか？……四肢は舌ほども高尚な身体の一部ではない。だからと言って、四肢を正しく使う方法を息子に、かなりの費用と時間を費やして教えるのを嫌がる紳士はいないだろう。それは立派なことである。では、人間の誉である言語／舌を使うことに注意を払わなくてよいのだろうか？ (Burgh 2)

バラはここで弁論術あるいは話す技術を身につけることと社会的な出世とを結び付けている点がシェリダンと多少異なるのだが、この引用部分で注目すべきは、バラが「舞台上立つか説教壇から話す (appearing upon the *stage* or in the *pulpit*) と述べている点である。シェリダンは『雄弁家』(*An Orator*, 1757年)の中で、正しい話す技術の理論は理解できても実践的な経験を積む唯一の方法が演劇であったと述べているが (21)、弁論術あるいは話す技術と演劇との間に類似点が多いのは言うまでもない。

バラは『話す技術』の初めの「話す技術論」で、朗読や公衆の前で話す際に使われる主な感情やユーモアを正しく表現するための規則について書いている。バラは正しい感情表現について語る際に、語り手の声や視線の在り方について詳しく説明し、身体のあらゆる部分を使って人は感情や気持ちを表現するのだと言う。「あらゆる心の動きに対して、自然はそれにふさわしい外見上の表現を与えており、ある一つの感情に相応しい表現は、他の感情には合わない」(12)、さらに「人の意図や感情にはすべて、自然が定めた外見上の表現がある」(13)と繰り返し述べている。それに続いて、バラは、朗読やスピーチを行う際に用いる感情表現の仕方について、発話と動き (speech and action) をどのように使ってさまざまな感情を表現すべきかを詳細に説明するのだが (14-26)、ここで示される表現方法は、前節で取り上げた『情感豊かなスパウター』のものと、取り上げる感情の数は異なるものの、同じ文言が散見される。先に引用した「嫉妬」については半分ほどが同じであり、恐怖 (fear) の説明に至ってはほぼ同じ記述になっているのだ<sup>13)</sup>。バラを『情感豊かなスパウタ

一』の編者が参照したのか、あるいは同じ書物を参照したのかについては確認できていないが、両者の感情表現に関する基本的な考え方が同じなのである。感情表現について説明した後に、身体表現については、その人物の年齢、性別、体調、置かれた状況に合わせる必要があると補足しているが(27)、弁論術または話す技術において、身振りなどの身体表現が極めて演劇的にならざるを得ないのは明らかであろう。

このバラの本で目を見張るべき特徴は、むしろ「話す技術論」に続く 300 ページを超える課題と、課題で取り上げた感情や意図ごとに分類した索引であろう。課題には散文を中心に詩や戯曲が納められているが、バラは文中に表れる感情や意図を、極端な場合は毎行、字句の横に示している点である。つまり、この教材を使う読者は、それぞれの文章がどのような感情を伴うかを知り、それに見合った外見上の表現を使うことが求められているのである。図版 7 に挙げたのは、『オセロ』を使った第 66 課(256)の最初の部分であるが、登場人物の名前の左側に「問いかけ」(QUEST.)「ずる賢さ」(CRAFT.)「無関心」(INDIFF.)「疑い」(DOUBT.)「ほのめかし」(INSIN.)といった単語でそれぞれのセリフで求められる意図や感情を示す一方で、アクセントを置くべき単語は斜体にして、学習者が正しく朗読する(あるいは演じる)ことを可能にしているのだ。また、読者は、例えば図版 7 の場合、左側の「無関心」(Indifference)や「ほのめかし」(Insinuation)といった単語を手掛かりに、索引を使って同じ表現を使う散文や詩の例を見つけて練習できるようになっているのである。これほど念入りに作られた弁論術の教材は、すくなくとも 18 世紀において他には見られない。

シェリダンやバラなど弁論術運動の指導者たちが、感情表現について説明する際にアロン・ヒル(Aaron Hill)の「演技論」(*Essay on the Art of Acting*, 1746 年)やジョン・ヒル(John Hill)の『俳優、または演技論』(*The Actor, or a Treatise on the Art of Playing*,

## LXVI.

## Villainous SURMISING. JEALOUSY.

Iago artfully endeavours to excite Othello to jealousy against his innocent wife Desdemona, to be revenged on Othello for a supposed injury. [Shakspeare. OTHELLO.]

QUEST. Iago. DID Michael Cassio, when you woo'd my lady,

CRAFT. Know of your love?

INDIFF. Othello. He did from first to last. Why dost thou ask?

INSIN. Iag. But for a satisfaction of my thought;  
No farther harm.

DOUBT. Oth. Why of thy thought, Iago?

INSIN. Iag. I did not think he had been acquainted with it.

Oth.

図版 7 バラの『話す技術』第 66 課(256)。「オセロ」の第 3 幕第 3 場で、デズデモーナとキャシオとの関係について、意味ありげにイアゴがオセロに問いただす場面。本文左側につけられた単語と斜体字に注意して演じる／読むことが期待されている。

1750年)など同時代の演技論を参照していたことは広く知られているが(Mullini 159-160), 結果的に弁論術運動に関する啓蒙的な書籍とスパウター向けの書籍が、その感情表現について、少なくとも外に表れた身体表現に関しては類似している点が多いのは、それぞれの書籍や引用集、口上集が対象とする読者層の違いなどを考えると興味深い。しかし、それは劇場という一つの空間に異なる階級の人々が集まり同じ芝居を観る一方で、ピット、ボックス席、ギャラリー、アッパー・ギャラリーなど劇場内を占める場所で階級ごとの棲み分けができていたことと同じであった。

このようなスパウターと弁論家の類似点は、弁論術運動の指導者にとっても気になるところであったようだ。弁論術運動の指導者の一人であるウィリアム・エンフィールド(William Enfield)は、ユニテリアン派の牧師で、ウォリントン・アカデミー(Warrington Academy)で修辞学と現代言語を教える文学の教師でもあった。弁論術運動の中で重要な教材の一つ『話し手』(*The Speaker, or, miscellaneous pieces, selected from the best English writers, and disposed under proper heads, with a view to facilitate the improvement of youth in reading and speaking*, 1775年)は、ウォリントン・アカデミーで使う教科書として編纂されたものであった。副題にもあるように、英国の優れた作家のさまざまな文章を集めたこの教科書を使い、学生の朗読と話す力を向上させることを目的としていた。巻頭の「弁論術について」という文章では、想定される読者である学生に向けて「自然に従うこと」を旨とし、「わざとらしい大仰な話し方は雄弁ではない」のであって、「良識と洗練された趣味が、優れた演説家には不可欠」である(vi)と述べて弁論術を修得するための8つの規則を掲げ、最後に以下のように戒める。

(国会議員、弁護士、聖職者のどの職業であれ)、その目的を忘れ、自らの職業の重要性を貶め、ついにはスパウターとして公衆の面前に現れ、わざとらしい大仰な話術と飾り立てた言葉で俗な大衆の耳を圧倒したとしよう。弁論術を知らないこういった者たちが目を見張り拍手喝采したとしても、賢明な人はそれを耳にして心を痛め、不快な気持ちにならざるを得ないのだ。ならば、話す技術を使うにあたっては、常に細心の注意を払い、謙虚に弁論術を用いること。人から称賛されるような傑出した弁論家になることは望ましいことではあるが、そのようなことよりも、賢明な政治家として、有能な法律家として、あるいは人のためになる説教者として尊敬されることの方が、何よりも大切であることを覚えておいて欲しい。(Enfield xxviii)

弁論術運動に関連して出版される書籍はほぼすべて300ページ以上あり、散文を中心にジャンルも内容もさまざまであるのであり、スパウター向けに編集された100ページ未満の口上集とは、質においても量においても比較にならないのは言うまでもない。またエンフィールド

## 18世紀英国演劇におけるスパウティング・クラブの流行と消滅

ドが教えたウォリントン・アカデミーの学生とスパウティング・クラブに集まる徒弟たちとでは、弁論術の素養以前に教養が違うのは疑いの余地はない。しかし、このエンフィールドの戒めは、たとえ弁論術を修得した者でも、いつでも簡単にスパウターのような話し方をしかなないという不安が、必ずしも杞憂ではないことを教えてくれている。弁論術運動とスパウティングの流行とは、全く別の次元で起きていたことのように思えるが、実際には、当事者が意図したかどうかは別として、つながりがあっていただけだ<sup>14)</sup>。

### 4. マスメディアが描くスパウティング・クラブ

18世紀の英国における新聞や雑誌などのマスメディアの急速な発達と拡大は、ロンドンという巨大な都市の中だけでなく、ブリストル、バース、マンチェスターを含め主要な都市間の情報の流通量と移動の速度を大きく変えることとなった。特に新聞は日々の演劇情報と劇評を掲載していたため、二大勅許劇場以外の非正規劇場や私的な演劇公演の情報を入手する貴重な手段であったほか、拡大発展の著しい当時のロンドンの実際には足を運ばないような場所について情報を集める方法のひとつでもあった。本節では、主に英国の新聞データベース（17th and 18th Century Burney Collection Newspapers と British Library Newspapers）で閲覧可能な新聞に掲載されたスパウターとスパウティング・クラブに関する記事に注目することで、スパウターとスパウティング・クラブが、英国社会の中でどのように見られていたのかを明らかにする。

「スパウティング・クラブ」という言葉が新聞に初めて登場するのは、戯曲や口上集よりも遅く、1760年7月18日付の *Public Advertiser* に載ったスパウティング・クラブの取り締まりに関する記事が最初である。そこでは、借り物の衣装をまとった数人の日雇い職人（Journeyman）が、ニューカッスル・アームズというパブでニコラス・ロウの『タマレイン』を上演したため逮捕され、法に従って処分を受けた、ということが報じられている。この記事で興味深いのは、「こういった違法行為は、無知あるいは意志薄弱のせいでは起こるので、今後このような不法行為が行われないように、用心のため、以下に法律の一部を印刷する」として、1737年の演劇検閲法の一部を印刷し、最後に「注意せよ（N.B）」として、ビールやエールなどの酒類を提供する場所での演劇公演も違法であるという箇所を指して、飲み屋でやるスパウティング・クラブはこれに該当する、と明記している点である。ほかにも、第1節冒頭で言及した取り締まりが1761年にあったが、新聞で確認できる限り最後の取り締まりに関する記事は、1764年12月13日付の *London Evening Post* に掲載された記事だが、ウェストミンスターのリバティ地区でパブ二軒の経営者が、パブで深夜まで行われる違法なスパウティング・クラブをやめない限り、次の四半期の営業許可は出さないという警告を受けたという内容である。第2節で取り上げたスキットが演じられて9年、すでにマーフ



イーの『徒弟』の上演回数が約 100 回になって初めてこのような報道があるのは一見不思議ではある。例えば、1760 年代にドゥルリー・レイン劇場で活躍したウィリアム・パウエル (William Powell) は病院の事務職員見習いであった 1750 年代にスパウティング・クラブで活躍していたことを考えても<sup>15)</sup>、60 年まで取り締まりがなかったとは考えられない。また、1760 年代の後半からは、スパウティング・クラブの取り締まりに関する記事がなくなり、むしろ取り締まりを求める記事が見られるようになるのは、社会の中でスパウティング・クラブが許容されつつあることの証左ではないだろうか。

そのことを確認できるのが、1762 年 1 月 16 日付の *St James's Chronicle or the British Evening Post* に掲載された記事である。ポーツマスのある紳士がロンドン在住の友人に送った手紙の一部として紹介されている内容は、ジャマイカに向かって出港する船団の一隻には舞台装置一式と旅役者の一団が乗船しており、他にもロンドンにある複数のスパウティング・クラブから連れてきた役者たちもいるため、航海中のリハーサルが楽しみだというものだ。あるいは、1765 年 5 月 7 日の *Public Advertiser* には、日雇い職人と徒弟が、日曜日にロンドン市内の一部の道路で通行料を取るための法律を議会に提出するのをやめるよう請願を出すつもりであるという記事がある。通行料を取らないで欲しいという理由が、平日には親方の下で働くために行けないスパウティング・クラブなどの娯楽施設に行けなくなるからだというのだ。1760 年代の前半は、取り締まりが行われる一方で、公にその存在が認知されるようになる移行期と考えるべきかもしれない。そこで参考になるのが、1764 年 12 月 12 日付の *Gazetteer and New Daily Advertiser* の記事である。それは善意氏 (Meanwell) からの報告記事で、最近スパウティング・クラブに行ったところ「数人の若い演者がとてもよかった」が、「会場に入場を許された人間については、何等かの規制を作ることを願う」と嘆いているものである。どうやら、60 年代の半ばには、スパウティング・クラブの演目の質については『徒弟』で描かれていたようなでたらめなモノではないクラブが増え、娯楽施設のひとつとして社会的に認められてきたのだらう<sup>16)</sup>。そのことは 1765 年 11 月 5 日付の *Public Ledger* の記事にも見て取れる。この記事では、最近になってスパウティング・クラブから「ドラマティック・アカデミー (Dramatic Academy)」に名称が変わった会場で、一部の客がタバコを吸ったために演目を楽しめなかった。「これほど楽しくためになる娯楽」を台無しにするような入場者については、今後厳格な規則を定めて欲しいというものなのだ。スパウティング・クラブとドラマティック・アカデミーとでは、かなり印象が変わるのは言うまでもないだろう。

ただしこの記事が注目に値するのは、この報告について編集者が、そもそも鑑賞の邪魔となる迷惑行為を云々する以前の問題として、「そのようなアカデミーが存在することが遺憾である」とし、次のように書いていることである。

そのようなアカデミーは、若者に有害な考えを植え付け、本来従事するはずの生業から若者を遠ざけ、その結果、若者は不幸や悲惨な目に合うことが往々にしてあるのだ。

そのような風潮が不幸にもこれほど世間に広まっているのは、常日頃からロンドンの二大劇場の俳優たちを褒めそやしてばかりいるからである。そのため、浮ついた若者たちは俳優という職業を素晴らしいものだと考え、親が子供たちに取り組んでもらおうと思っていた学業や職業を蔑ろにすることになり、ついには自ら大変不幸な状況に陥り、友人を苦しめ、世間に害をなすようになるのだ。それゆえ、善意から申し上げたいのだが、ドラマティック・アカデミーのようなものは、数多くの害悪に溢れかえった決して看過できない迷惑な存在であり、そのようなものは潰して当然なのだ。

この記事ではスパウティング・クラブの違法性を問うのではなく、道徳的にスパウティング・クラブには問題があり、取り締る、あるいは閉鎖するべきであるというのである。このようなスパウティング・クラブを批判する記事は、70年代前半まで散見されるのだが、ここではスパウティング・クラブは決まって「秩序ある立派な社会とは矛盾するあのスパウティング・クラブという名の最も下劣な悪の学校」(1771年12月21日付 *General Evening Post*)、あるいは「スパウティング・クラブと呼ばれる怠惰と放蕩の温床」(1773年11月6日付 *Craftsman or Say's Weekly Journal*) のように書かれている。

こういったスパウティング・クラブへの批判的な言説は、二種類の物語によって下支えされて社会に流通していたといつてよいだろう。ひとつは、「徒弟を辞めて俳優になったスパウターたちの末路」という物語である。例えば、徒弟であったにもかかわらずスパウティング・クラブに夢中になり、親方の下を離れて旅役者の一団に加わったもののうまくいかず、最後はすべてを失い後悔する者の手記(1765年8月2日付 *Public Advertiser*) や、同じように旅役者の一団に入った後に身を持ち崩して自殺を図ったが死にきれず、「今や一人寂しく死を待つ状態である」(1773年11月6日付 *Craftsman or Say's Weekly Journal*) といった「物語」の類である。

そしてもう一つが、「スパウティング・クラブ訪問記」である。スパウティング・クラブの出し物をほめる記事についてはすでに見たが、その出し物のひどさを詳細に記した訪問記もいくつかあった。例えば、1765年2月12日の *Public Advertiser* では、知人に説得されて仕方なくスパウティング・クラブに行ってみたが、そこにあつまるのは「これまでに見たこともないような恥知らずで情けない連中」だったとして、ひどい演技と訛りの強い英語を説明している。ここでは1781年に出版された書籍『現代のロンドン・スパイ全集、1781年版』(*The complete modern London spy, for the present year, 1781*)<sup>17)</sup> の訪問記を見てみよう。本書で約10ページにわたって詳しく描かれる「スパウティング・クラブ」は、作者がタイバーン・ロード(Tyburn Road)の端にたどり着いたところから、次のような文章で

始まる。

その場所の様子を伺って、すぐにここが世間でいう「スパウティング・クラブ」であることが分かった。ここにはさまざまな若者が、娯楽を求め、あるいは舞台俳優としての才能を磨きにやってくる。(連れのアンバー氏の言うところでは) この俳優志望の若者たちが実際に俳優になれることは滅多にないそうだ。そのくせ、そういった若者たちは、王立劇場で演技ができるようになったとしても、まずその前に正さなくてはいけないような悪癖をここで身につけることが多いそうだ。(113)

これに続いて、俳優のセリフが聞き取れないのでギリシア人が演じているのかと思ったらアイルランド人であったとか(113)、ロミオが芝居の最中居眠りをするので、目覚めさせようとジュリエットが激しく叩いて愛情を表現した(114)とか、イングランド西部の訛りがひどくて何を言っているのかわからないマクベスを演じた俳優が、聴衆から非難された話(115)、さらには、芝居が下手だと文句を言った客をスパウターが殴る(117)といったことを紹介している。また、スパウティング・クラブが終わったら朝の6時近くになっていた(116)とあり、通常は夜の9時か10時から始まるクラブが徒弟たちの仕事にどれほど悪影響を与えていたかを理解することができるというのである。1765年の記事も81年の記事も、記述の詳しさと演じている作品名が違うだけで、ほぼ同じことを述べており、しかもその内容が『徒弟』の中のスパウティング・クラブの場に似ていることも明らかであろう。皮肉なことだが、『徒弟』で創られたスパウティングの嘲笑な描写が一つのひな型となり、スパウティング・クラブ批判として再生産されているのである<sup>18)</sup>。

## 5. 消えるスパウター／スパウティング・クラブ

18世紀後半の新聞や雑誌でスパウターあるいはスパウティング・クラブについて言及する記事は、当然のことながら、通常の演劇はもとより非正規劇場に関するものよりも圧倒的に少ない。しかし、1760年代から70年代に書かれた比較的少数の記事からも、徒弟たちの娯楽が批判を受けながらも、次第に社会の中で占める位置が定まっていたことがわかる。その意味で、80年代以降にスパウティング・クラブの問題が言及されなくなるのは当然であった。その一方で、80年代から90年代になっても散見された口上集の広告もまた90年代には急激に減るのはスパウティング・クラブ自体が減ってきたからであろうか。

上述のように、スパウター／スパウティング・クラブが、1741年のギャリックのデビューとその後のドゥルリー・レイン劇場での活躍と強く結びついていたとすれば、76年の引退以降、ギャリックの演技に接して俳優に憧れるようになった世代のスパウターが徒弟から

熟練した職人や親方へと次第に成長するにつれて、スパウティング・クラブの活動自体が変質するあるいは衰退するのは当然であっただろう。『徒弟』は再演され続けるが、実際のスパウティング・クラブが、『徒弟』で演じられるものや非正規劇場で演じられたスキットのそれとはかなり違ったものになっていたであろうことも、第4節で確認したとおりである。記事の中でスパウティング・クラブが「ドラマティック・アカデミー」への名称を変更したとあったが、18世紀末には非正規劇場が数多く開場したことは、ロンドンにおける演劇的な出し物の興行形態を大きく変え (Moody 22-31)、以前ならば海外航路を使って植民地に出向くこともあった俳優志望の若者たちが、ロンドンでの興行に関わる機会が増えた可能性は十分にあるだろう。1770年前後からバース、エジンバラ、リヴァプール、マンチェスター、ブリストルといった地方の大都市で勅許を受けた正規の劇場が開場したことや、俳優のサミュエル・バトラー (Samuel Butler) がヨークシャーのリッチモンドを中心にしてイングランド北部の7つの都市を巡業したように、70年代以降に地方都市に劇場 (provincial theatres) が急増したことなど、スパウターになるような俳優志望の若者の受け皿が数多くできたことも、スパウティング・クラブの需要が減った理由であると言えよう。

専用の劇場もなければ、誰がメンバーであったのかもほとんど記録の残っていないスパウティング・クラブではあるが、『劇場楽屋秘史』 (*The Secret history of the Green Room*, 1792年) が記録する当時の俳優たちの履歴が示しているように、スパウティング・クラブの中にはプロの俳優を輩出するほど質の高いものもあったことは事実である。勅許劇場の一番上のアッパー・ギャラリーで観劇した徒弟たちが劇場の外で演劇とどのように接し、どのように演劇と関わっていたのかを辿ることで、18世紀後半の英国演劇の知られざる一面が明らかになるだろう。

注

- 1) 本論は2021年度の東京経済大学国内研究の研究成果の一部である。
- 2) 以下本論において 'spouter' は「アマチュア俳優」とは訳さず、「スパウター」とする。注4で述べたように、デラヴァルのような階級が私邸に劇場を造り上演することが18世紀後半には少なからずあったこと、さらには19世紀初頭には一層顕著になるが、中流階級の間でも家族で演劇を上演するようになってきたためである。こういった「アマチュア俳優」と「スパウター」とは階級や社会的な批判の在り方が異なるため、混同を避けるため「スパウター」とカタカナで表記するものである。
- 3) *The Gentleman's Magazine*, 31 (1761), 601.  
ブライドウェル矯正院 (Bridwell House of Correction) は、軽犯罪を犯した者や浮浪者、物乞い、逃亡または秩序を乱す徒弟や召使などを収容することを目的としたもの。https://www.digitalpanopticon.org/Bridewell\_House\_of\_Correction\_Prisoners\_1780-1795 最終閲覧日: 2023年7月6日。
- 4) フランシス・デラヴァルの『オセロ』公演は、当時の新聞でも詳しく報道されている。舞台を

観ようとした貴族や国会議員で劇場周辺の道が通れず歩かなくてはいけなかったことをはじめアマチュア俳優ではあるがデラヴァル達の演技がいかに優れていたのかが詳細に語られている。*London Evening-Post*, No. 3648, 7-9 March, 1751 および *General Evening Post (London)*, 7-9 March 1951。デラヴァルの公演をはじめ貴族や郷土 (private theatricals) の演劇活動については Rosenfeld の第 4 章 ‘The Theatricals of the Gay Delavals’ を参照。1737 年の演劇検閲法 (Licensing Act) では、勅許劇場に属さない俳優は「悪党、ごろつき、物乞い、浮浪者 (rogues, vagabonds, sturdy beggars and vagrants) とみなされ逮捕されることになっているうえ、金銭または報酬を受け取って芝居を演じたものは、懲罰を受けるか 50 ポンドの罰金を科せられることになっていた。演劇検閲法については、以下で法令を読むことができる。‘1737: 10 George 2 c.28: The Licensing Act’ *The Statutes Project* <https://statutes.org.uk/site/the-statutes/eighteenth-century/1737-10-george-2-c-28-the-licensing-act/> 最終閲覧日：2023 年 7 月 6 日。

- 5) 1758 年に出版された風刺詩 *The spouting-Club* の最後 (15) で、作者 Woty はマーフィーの戯曲に言及した際に、spouting clubs 人気を伝染病に譬えて ‘epidemic Rage’ と呼んだ。
- 6) 1800 年までの上演回数については、*The London Stage Database, 1660-1800* による。<https://londonstagedatabase.uoregon.edu/sphinx-results.php?sortBy=relevance&date-type=1&start-year=1756&end-year=1800&performance=Apprentice&author=Murphy&ptype%5B%5D=p&ptype%5B%5D=a&actor%5B%5D=&role%5B%5D=&keyword=&limit=25&p=10> 最終閲覧日：2023 年 7 月 6 日。
- 7) 「滑稽なスパウティング・クラブの描写」は 1787 年 1 月 9 日付の *Gazetteer and New Daily Advertiser* 以外にも 80 年代に散見される表現であった。また、確認できる限りでは 1797 年 11 月 27 日付の *True Britain*, 1798 年 12 月 25 日付の *Manchester Mercury* に至るまで、主にロンドンではあるが、バースやマンチェスターなど大都市でスパウターやスパウティング・クラブという名のスキットの上演が新聞紙の告知欄などで確認できる。
- 8) London Stage Database によると 5 月 23 日より夏の興行が始まっているが、23 日の *Public Advertiser* に掲載された広告では演目の内容が少し変わっており、そこには「スパウティング・クラブ」とは書かれておらず、データベースには詳細がないため、ここでは 5 月 28 日から公演が始まったと考える。<https://londonstagedatabase.uoregon.edu/sphinx-results.php?theatre=Mary-le-Bone+Gardens&date-type=1&start-year=1776&start-month=5&end-year=1777&end-month=9&performance=&author=&actor%5B%5D=&role%5B%5D=&keyword=&sortBy=relevance> 最終閲覧日：2023 年 7 月 29 日
- 9) ロイヤルティ劇場は、ロンドンのウェスト・エンドから遠く離れたイースト・エンドに、ドゥルリー・レイン劇場に出ていた俳優のジョン・パーマー (John Palmer) が、1787 年 6 月に開設した新しい劇場。地元の行政官より上演許可を得たと考えたパーマーは、1787 年の柿落としで 5 幕のセリフ劇 (『お気に召すまま』) を上演したため問題となり、その後も演劇上演に関わる許認可制度の問題からたびたび劇場閉鎖に追い込まれるような劇場であった。ロイヤルティ劇場では他の非正規劇場と同じような演目上演されたが、パーマーが半ば意図していたように、上演の許認可と 3 つの劇場による演劇の独占の問題を提起することとなり、19 世紀の劇場の検閲に関わる法制度の変革に影響を与えることとなった。ロイヤルティ劇場については、Moody, 21-24 および Warrall, Chapter 2 “The Suppression of the Royalty Theatre in the

East End London”を参照。

- 10) ロンドンの徒弟はイングランドとウェールズなど地方からロンドンに出てくる場合も少なくなかったため、18 世紀のロンドンについていえば、16 歳前後で徒弟となり、その後 5 年から 7 年の修行を経て一人前になったとされる (Wallis, Webb & Minns 12-21)。また、ロンドンで徒弟になるには職種・ギルドによって差はあるものの、徒弟になる際に親方に 30 ポンドから 40 ポンド、多い場合は 100 ポンド以上の保証金を親が支払うことになっていたため、紳士や郷士の次男や三男、法曹関係者の子弟から製造業者あるいは小売業者の子弟まで、ある程度の経済的に恵まれた中流階級の家系出身者しか少なくともロンドンの徒弟にはなれなかった。例えば 18 世紀の建設業に携わる非熟練労働者の年収が 12 ポンド程度であったことを考えると、誰もが望めば徒弟になれるというわけではなかったことがわかる (Minns & Wallis 9-10)。また徒弟は契約期間の最後の 2 年間になるまで、衣食住が提供されることを条件に給与はなく、最後の 1, 2 年は普通の職人の半分の給与で働いた。
- 11) 18 世紀中に出版されたスパウター向けの口上・セリフ集全体では、ギャリックが書いたものが 13% 以上あったという指摘もある (Ritchie 53)。
- 12) シェリダンの英国教育の改良という趣旨に対する批判および、シェリダンが考える「英国」については、Goring の第 3 章 “Thomas Sheridan: Forging the British Body” を参照。
- 13) 以下、二つの書籍の感情表現の方法がほとんど同じであることがわかるだろう。極端な例として「恐怖」(fear) の表現について『話す技術』と『情感豊かなスパウター』から比較のために英語で引用する。イタリックも含めて異なる部分に下線を引いて示す。*Fear, violent and sudden, opens wide the eyes and mouth; shorten the nose; draws down the eyebrows; gives the countenance an air of wildness; covers it with deadly paleness; draws back the elbows parallel with the sides; lifts up the open hands, the fingers together, to the height of the breast, so that the palms face the dreaded object, as shields opposed against it. One foot is drawn back from the other, so that the body seems shrinking from the danger, and putting itself in a posture for flight. The heart beats violently; the breath is fetched quick and short; the whole body is thrown into a general tremor. The voice is weak and trembling; the sentences are short, and the meaning confused and incoherent. Imminent danger, real, or fancied, produces, in timorous persons, as women and children, violent shrieks, without any articulate sound of words; and sometimes irrecoverably confounds the understanding; produces fainting, which is sometimes followed by death. (The Art of Speaking 17)*  
*Fear, violent and sudden, opens wide the eyes and mouth; draws down the eyebrows; gives the countenance an air of wildness; covers it with deadly paleness; draws back the elbows parallel with the sides; lifts up the open hands, the fingers together, to the height of the breast, so that the palms face the dreadful object as shields opposed against it. One foot is drawn back from the other, so that the body seems shrinking from the danger, and putting itself in a posture for flight. The heart beats violently; the breath is fetched quick and short; the whole body is thrown into a general tremor. The voice is weak and trembling; the sentences are short, and the meaning confused and incoherent. Imminent danger, real, or fancied, produces, in timorous persons, as women and children, violent shrieks, without any articulate sound of words; and sometimes irrecoverably confounds the understanding; produces*

*fainting*, which is sometimes followed by *death*. (*Sentimental Spouter* xiv)

- 14) 朗読への関心の高まりから、1770年代には詩やシェイクスピアの一節を読む朗読会の案内や感想が新聞に掲載されることがあった。1774年2月4日の *Public Advertiser* には、ドクター何某が「修辭的に正しく」(rhetorical propriety) ミルトンの詩やシェイクスピアの一節を朗読すると聞いて聴きに行ったが、スパウティング・クラブの大仰な読み方がっかりした、という投稿がある。朗読会を聞きに行くような、弁論術ブームに関わる階層の人間の中には、スパウティング・クラブに出入りする者もいたということだろう。次節で見るように、スパウティング・クラブの「観客」は、徒弟たちだけではなかったのだ。
- 弁論術運動における朗読のブームと、同じく18世紀中ごろから始まる私邸での演劇上演 (private theatricals) とはつながりが深い。第1節で言及した1751年のフランシス・デラヴァルの『オセロ』公演はその代表的なものであった。弁論術を教えた俳優のチャールズ・マクリンがデラヴァルたちの公演の演技指導をしたことは、アマチュア演劇とプロの俳優・朗読指導者との距離の近さを併せて考えるべきだろう。家庭での演劇上演と朗読との関係については Williams 第6章第3節“Homemade Drama”を参照。
- 15) ウィリアム・パウエルについては、1769年8月4日付 *Lloyd's Evening Post* の追悼記事と Joseph Haslewood (190-194) による。
- 16) 同じ善意氏 (Meanwell) と名乗る人物が、1764年12月19日付の *Lloyde's Evening Post* でも、その前の週の水曜日にウッドストリートのスパウティング・クラブに行ったところ、素晴らしい公演で、特にある若い演者についてはプロの俳優になるだけの能力があると絶賛している。
- 17) 書誌に挙げた異常に長い副題が示す通り、この本は著者が友人とともにロンドン市街の隅々にまで分け入り、それぞれの通りで日夜起る普段目にしないような出来事を、通りを歩き回りながら実際に見てきたこととして報告するもので、さまざまな階級の人間が集まり急速に拡大するロンドンに対する読者の好奇心を満たすものであった。
- 18) このようなスパウティング批判の中心にあるのは、道徳的な物ではなく、むしろ当時の演劇批判にも共通する、経済的な理由であったと考えるべきであろう。重要なのは、近い将来に技能労働者として働く徒弟を管理することであり、いかに真面目で使い勝手の良い人材を育成するかということを優先するためには、親方の下で勤勉に働くことが何よりも優先されるべきであった。Barish の第8章の特に239-243を参照。

## 引用文献

### 一次資料

Atkinson, Joseph. *Tit for Tat: A Comedy*. London, 1788. ECCO.

Anno. *The British spouter; or, Stage assistant: Containing the most celebrated prologues and epilogues, that have been lately spoken, in the different theatres, at the acting of the most eminent plays. The whole being intended to make young persons acquainted with the art of speaking, and to impress upon their minds sentiments of morality*. London, 1773. ECCO.

———. *The complete London jester, or wit's companion; containing all the fun and all the humour, all the Learning and all the Judgment, which has lately flowed from the two universities, from the Two Theatres, from White's Chocolate-House, from the Bedford Coffee-House;*

- or, from the Spouting Clubs, and Choice Spirits Clubs in London and Westminster. Including all the Fashionable Jestes, Epigrams, Merry Tales, Humorous Jokes, Bon Mots, Choice Songs, Conundrums, Irish Bulls, Comical Humbugs, Droll Narrations, Smart Repartees, New Adventures, Funny Epitaphs, and Witticisms. Which will expel Care, drown Grief, banish the Spleen, improve the Wit, create Mirth, entertain Company, and give the Reader a light Heart, and a chearful Countenance. The whole teaching the agreeable Art of Story-Telling, and furnishing Pieces of Wit, for the Amusement and Improvement of both Sexes.* London, 1765. ECCO.
- . *The complete modern London spy, for the present year, 1781; or, a real new, and universal disclosure, of the secret, nocturnal, and diurnal transactions, in and about the cities of London and Westminster, and the borough of Southwark.... Written by a gentleman of fortune.* London, 1781. ECCO.
- . *Original prologues, Epilogues, and Other pieces never before printed. To which is added, a collection of such as are celebrated for wit, humour or entertainment, spoke at the theatres or at private plays, with several curious and entertaining pieces not to be found in any other collection. Most humbly inscribed to all lovers of theatrical diversion, whether bloods, bucks, joyous spirits, honest fellows, smarts, jessamies, jemmies, beaus and fribbles, but more in particular to the Societies of Spouters.* London, 1756. ECCO.
- . “Some Account of the new FARCE call’d the APPRENTICE.” *The London Magazine*. January, 1756. 3–5.
- . *The Sentimental Spouter: Or, Young Actor’s Companion: Containing I. A Treatise on Oratory in General, and Theatrical Acquirements in Particular.... II. A Collection of the Most Celebrated Scenes, Speeches, and Soliloquies, Selected from the Most Admired Tragedies and Comedies, Etc.* London, 1774. [https://books.google.co.jp/books/about/The\\_Sentimental\\_Spouter\\_Or\\_Young\\_Actor\\_s.html?id=iwRXAAAACAAJ&redir\\_esc=y](https://books.google.co.jp/books/about/The_Sentimental_Spouter_Or_Young_Actor_s.html?id=iwRXAAAACAAJ&redir_esc=y) 最終閲覧日 2023 年 8 月 1 日
- . “Introduction” to *The sentimental Spouter; or Young Actor’s Companion*. Lisa Zunshine Ed. *Acting Theory and the English Stage, 1700–1830*. 5 vols. Abingdon, Oxfordshire: Routledge, 2016. vol. 2. 73–90.
- . *The spouter’s companion; or, theatrical remembrancer. Containing a select collection of the most esteemed prologues and epilogues, Which Have Been Spoken By the most celebrated Performers of both Sexes.* London, 1770. ECCO.
- Beaumont, Francis, *The Knight of the Burning Pestle*. Ed. Michael Hattaway. New Mermaids. New York: W.W. Norton, 1969.
- Burgh, James. *The art of speaking. Containing I. An essay; in which are given rules for expressing properly the principal passions and humours, which occur in Reading, or public Speaking; and II. Lessons taken from the antients and moderns (with Additions and Alterations, where thought useful) exhibiting a Variety of Matter for Practice; the emphatical Words printed in Italics; with Notes of Direction referring to the Essay. To which are added a Table of the Lessons; and an Index of the various Passions and Humours in the Essay and Lessons.* Lon-



- don, 1761. ECCO.
- The Craftsman or Say's Weekly Journal*, 6 November 1773. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- Enfield, William. *The speaker: or, miscellaneous pieces, selected from the best English writers, and disposed under proper heads, with a view to facilitate the improvement of youth in reading and speaking. To which is prefixed an essay on elocution.* Dublin, 1775. ECCO.
- The Gazetteer and New Daily Advertiser*, 12 December 1764. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- , 9 January 1787. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- The General Evening Post*, 7–9 March 1751. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- , 21 December 1771. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- The Gentleman's Magazine*, 31 (1761) 601.
- Griffith, R. Ed. *The Monthly Review or Literary Journal*, 51. July - December 1774. <https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=hvd.hxjfh6&seq=16> 最終閲覧日 2023 年 7 月 31 日
- Grose, Francis. *A Classical Dictionary of the Vulgar Tongue*. 1811 edition. Redditch, Read Books: 2016. Kindle 版
- Haslewood, Joseph. *The secret history of the green room: containing authentic and entertaining memoirs of the actors and actresses in the three Theatres Royal- Drury-Lane.* London, 1792.
- The Lloyd's Evening Post*, 9 December 1764. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- , 4 August 1769. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- The London Evening Post*, 7–9 May 1751. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- , 13 December 1764. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- The Morning Post and the Daily Advertiser*, 28 May 1776. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- The Morning Chronicle*, 1 April 1774. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- Murphy, Arthur. *The Way to Keep Him and Five Other Plays*. Ed. John Pike Emery. New York: New York University Press, 1956.
- The Public Advertiser*, 18 July 1760. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- , 12 February 1765. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- , 7 May 1765. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- , 2 May 1765. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- The St James's Chronicle or the British Evening Post*, 16 January 1762. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.
- Sheridan, Thomas. *British education: or, the source of the disorders of Great Britain. Being an essay towards proving, that the immorality, ignorance, and false taste, which so generally pre-*

*vail, are the natural and necessary consequences of the present defective system of education. With a attempt to shew, that a revival of the art of speaking, and the study of our own language, might contribute, in great measure, to the cure of those evils. In three parts. I. Of the use of these studies to religion, and morality; as also, to the support of the British constitution. II. Their absolute necessity in order to refine, ascertain, and fix the English language. III. Their use in the cultivation of the imitative arts: shewing, that were the study of oratory made a necessary branch of the education of youth; poetry, musick, painting, and sculpture, might arrive at as high a pitch of perfection in England, as ever they did in Athens or Rome.* London, 1752. ECO.

———. *A course of lectures on elocution: together with two dissertations on language; and some other tracts relative to those subjects.* London, 1762.

Shakespeare, William, et al. *The Norton Shakespeare.* Third edition. New York, W. W. Norton & Company, 2015.

Stamper, Francis. *A modern character, introduc'd in the scenes of Vanbrugh's Æsop. As it was acted at a late private representation of Henry the Fourth, perform'd gratis at the little opera-house in the Haymarket. To which is added, The Prologue and Epilogue to the Play.* London, 1751. ECCO

*The Star and Evening Advertiser*, 24 November 1797. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.

*The True Britain*, 24 November 1797. Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection.

Woty, William. *The Spouting-Club: a mock heroic, comico, farcico, tragico, burlesque poem. By the author of The Robin Hood society: a satire.* London, 1758. ECCO.

## 二次資料

Campbell, Lilly B. “The Rise of a Theory of Stage Presentation in England during the Eighteenth Century”. *PMLA* 32 (1917), 163–200.

Liesenfeld, Vincent J. *The Licensing Act of 1737.* Madison: Univ. of Wisconsin Press, 1984.

Moody, Jane. *Illegitimate Theatre: Theatre in London, 1770–1840.* Cambridge: Cambridge UP, 2000.

Minns, Chris and Patrick Wallis. “Why did (pre-industrial) firms train? Premiums and apprenticeship contracts in 18<sup>th</sup> century England.” Working Paper London School of Economics, Economic History Department Working Papers No. 155, 2011.

<http://www.lse.ac.uk/Economic-History/Assets/Documents/WorkingPapers/Economic-History/2011/WP155.pdf> 最終閲覧日 2023 年 8 月 3 日

Mullini, Roberta. “Reading Aloud in Britain in the Second Half of the Eighteenth Century: Theories and Beyond.” *Journal of Early Modern Studies*, 7 (2018), 157–176.

Ritchie, Leslie. “The Spouters' Revenge: Apprentice Actors and the Imitation of London's Theatrical Celebrities”. *The Eighteenth Century: Theory and Interpretation*, 53/1 (2012), 373–94.

Rosenfeld, Sybil. *Temples of Thespis: Some Private Theatres and Theatricals in England and*

- Wales, 1700–1820*. Society of the Theatre Research, 1978.
- Sands, Mollie. *The Eighteenth-Century Pleasure Gardens of Marylebone*. L
- Stone, George Winchester, Jr. and George M. Karl. *David Garrick: A Critical Biography*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University, 1979.
- Wallis, Patrick, Cliff Webb and Chriss Minns. “Leaving Home and Entering Service: The Age of Apprenticeship in Early Modern London.” Working Paper London School of Economics, Economic History Department Working Papers No. 125, 2009.  
<http://www.lse.ac.uk/Economic-History/Assets/Documents/WorkingPapers/Economic-History/2009/WP125.pdf> 最終閲覧日 2023年8月3日
- Williams, Abigail. *The Social Life of Books: Reading Together in the Eighteenth-Century Home. The Lewis Walpole Series in Eighteenth-Century Culture and History*. New Haven: Yale University Press, 2017. Kindle file.
- Worrall, David. *Theatrical Revolution: Drama, Censorship, and the Romantic Period Subcultures 1773–1832*. Oxford: Oxford UP, 2006.